

研究代表者 所属・職：経済学部・准教授

氏 名：原田 忠直

研究課題名：現代中国社会における「低収入層」と「包（請負）」システムの利益分配構造

取り組み状況

中国の「低収入層」に対する調査・研究の蓄積は決して少なくないが、未だに解明されない点として、「低収入層」の「生活満足度」が高く維持され続けている、という一つの謎が存在している。言い換えれば、経済格差が統計上では顕著に現れるのだが、実際の「低収入層」はあまり不満を感じていないというズレである。このズレの背景として、「低収入層」が「包」的営みを通して、一定の満足感を得て、さらに将来に希望（これは「包」を通して商売を行い、さらにそれを手広く行うことができるようという希望を指す）を抱き生活しているためではないか、という一つの仮説を立て、それを論証することが、本研究の目的である。と同時に、この調査・研究を通して、「包」システムを通じて中国の社会・経済の独自性を証明する。このような目的に従い、本年度は、浙江省海寧市の 3 つの民工子弟学校、広州市の石牌村、江西省の鷹潭市郊外の農村、重慶市内の農民工居住地区などで「低収入層」の実態と「包」の利益分配構造についての調査を進めた。

研究成果の内容

今回の調査を通して明らかとなった点は、以下の通りである。

「低所得層」（主に農民工）の生活および経済活動において重要な機能を果たしているシステムは、「生得的ネットワーク」と「包」である。まず、「生得的ネットワーク」を、今回の調査メモから描けば次のように捉えることができる。周知のように戸籍制度とは、一つの身分制度であり、この制度によって都市住民、農民、農民工という身分社会が成立している。そして、戸籍制度のもと、農民工は、都市住民が享受している行政サービス、政治的諸権利から排除され、あるいは、都市住民

が依存する生得的ネットワークから排除されるため、自らの生得的ネットワークに依存しなければ生きていくことはできない。つまり、生得的ネットワークとは、都市にやって来た農民を、都市住民と明確に区別し、農民工という身分に据え置き続ける一つの容器にほかならない。言い換えれば、戸籍制度と生得的ネットワークとがワンセットとなり、農民工という身分を作り上げ、維持し続けていたといえる。さらにいえば、農民工の「低所得層」という経済的地位をも固定化させるものである。しかし、もし戸籍制度がなければ、生得的ネットワークは存在しなかったのだろうか。いうまでもなく、中国に限らず、世界の歴史を紐解けば、農村出身者が、都市で生得的ネットワークに依存しながら生計を立てていた事例はいくらでもあり、この問いに答えることは難しくない。ただし、生得的ネットワークに依存する農民工とは、計画経済、文化大革命、人民公社などの「社会主義」を経験し、その上、改革・開放後の市場経済のなかで生きる人びとにほかならない。「社会主義」と「市場経済」という経験を通じたにもかかわらず、生得的ネットワークが今なお存続している事実をどのように理解すればよいのだろうか。もちろん、この問いは中国における「社会主義」の経験、「市場経済」の意義を問い直すことでもあるが、これらの問題は脇に置き、生得的ネットワークの紐帯力に目を向ければ、「社会主義」、「市場経済」の下でも、社会の深部において「体制の価値を問い直す」、あるいは「体制とは異なる価値」を育むものとして生得的ネットワークは存在していたのではないかと問い直すことが可能ではなかろうか。そして、混沌とする社会の隙間から覗く生得的ネットワークの存在は、国家が支配できない「領域」、国家を相対化する力を感じたためであったという解釈を導くことも可能であろう。もちろん、「生

得」という言葉には、どこまでも「後進性」という意味が付きまとうが、その言葉では語り切れない、生得的ネットワークに内包された「価値観」の存在が、中国経済躍動の大きな力となっているのではないかと推測されよう。

次に、生得的ネットワークと「包」との関係を読み解けば、この二つのシステムを結びつけて考えれば、「低収入層」にとってのセーフティネットの機能を指摘することができる。都市の片隅で仕事がなくとも、このネットワークに属していれば、飢えることもなければ、新たな仕事を紹介してもらうこともあり、生活基盤を築くための道が開かれることになるだろう。さらに、起業資金の借入れは今なお頻繁に行われており、金融的役割を担っている面もある。また、一つの仕事を（製造から販売まで）、ネットワーク内部で分業体制が敷かれることもある。このように生得的ネットワークとは、生活面における相互扶助の役割を担っているだけではない。ただし、ネットワーク内部における経済活動にはその広がりに限界が生まれることはいうまでもない。より商売を大きく広げるためには、生得性をどこまでも引きずるわけにはいかない。それゆえ、ここで登場するのが、「包」というシステムである。すなわち、私的な狭い領域からもっと広々とした公的な領域へと、生得的ではない他者と交わりによる経済活動を意味する。もちろん、生得的ネットワークにおける経済活動において「包」の機能（たとえば、利潤の再分配、対等性などの要素）を発見することは容易であり、このネットワークの内部で「包」システムが温存されてきた可能性は高い。つまり、「低所得層」の満足度が高く維持されているのは、生得的ネットワークによって最低限の生活は、利潤の再分配や人間関係の対等性は保障され、その上、「豊かになるための梯子」も用意されているといえよう。この点は、調査を通して導いた一つの結論でもある。そして、今後の研究では、生得的ネットワークによって保障される「低所得層」の生活、さらに生得的ネットワークに縛られない「包」によって、「低

所得層」がどのように新たなステージへと導かれることという、中国の独自のシステムをより明確に整理し、その成果を発表していきたい。